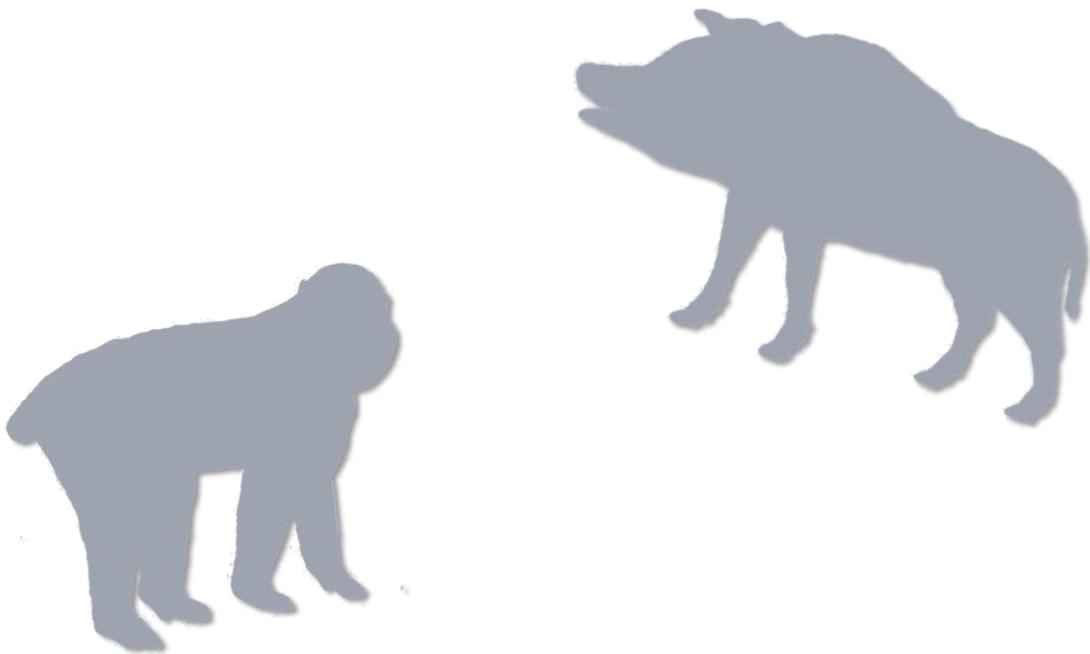


第2回  
東北野生動物管理研究交流会 in 福島

東北の

# 野生動物管理

を考える



2015. 11. 28. Sat.

10:00 - 17:15 (9:30 開場)

福島大学 金谷川キャンパス L4 教室

## タイムテーブル

- 10 : 00～10 : 05 開会挨拶  
玉手 英利 (山形大学)
- 10 : 05～10 : 10 研究交流会 趣旨説明  
江成 広斗 (山形大学)
- 10 : 15～12 : 30 **福島セッション 福島の野生動物管理を考える**  
《事例紹介》  
帰還困難・居住制限区域内における野生動物の生息状況  
奥田 圭 (福島大学)  
「動物の縄張り」に帰る ～原発事故5年 避難住民たちの今～  
藤松 翔太郎 (NHK 福島放送局)  
低レベルで放射能汚染された地域におけるこれからの野生動物管理  
小寺 祐二 (宇都宮大学)  
会津地方におけるこれからの民間団体の役割を考える  
今野 万里子 (NPO 法人おーでらす)
- 《パネルディスカッション》  
福島の野生動物管理のこれから  
コーディネーター：玉手 英利  
パネラー：奥田 圭 / 藤松 翔太郎 / 小寺 祐二 / 今野 万里子  
西崎 伸子 (福島大学) / 木幡 栄子 (福島県農業総合センター)
- 12 : 30～15 : 10 ポスター発表 ー昼食休憩ー  
(会場：大学生協2階 ホール)
- 15 : 25～17 : 05 **基調講演 鳥獣対策の次の一手**  
平田 滋樹 (長崎県農林部農山村対策室)
- 17 : 05～17 : 15 総括・閉会挨拶  
林田 光祐 (山形大学)
- 17 : 30～20 : 00 懇親会・ポスター発表  
(会場：大学生協2階 ホール)

## YU-COE(C) 人口減少社会適合型野生動物管理システム創生拠点 のご紹介

江成 広斗  
山形大学農学部・創生拠点代表

今年 5 月に鳥獣保護管理法が施行され、日本の鳥獣行政は大きな転換期を迎えました。一方で、鳥獣の保護管理や対策が求められる現場に視点を移すと、鳥獣被害の多寡に関わらず、人口減少や高齢化に伴って、生業や日常生活における閉塞感に苛まれている農村集落は依然として増加の一途です。こうした人口減少時代において、野生動物問題の解決に向けた実行可能な選択肢とは何なのでしょう。制度の変更や、補助金の拡充だけでは対処の難しい現実を直視し、新たな時代に適合する新しい野生動物管理のあり方が今まさに求められています。

昨年度末に山形大学先進的研究拠点（YU-COE）としてスタートした人口減少社会適合型野生動物管理システム創生拠点では、こうした喫緊の課題に取り組むために、人口減少率が全国で最も高い水準にあるここ東北において、これからはじまる本格的な人口減少時代においても適応可能な新たな野生動物管理システムのプロトタイプ（原型）の構築に挑戦しています。

### <現在の取り組み>

- ① 野生動物管理に必要とされるデータの集積・効率化  
(1) 野生動物の捕獲・目撃情報、(2) 被害情報、(3) 対策状況、に関する情報の効率的収集と、情報蓄積の方法について整理
- ② 簡便な個体群モニタリング手法の開発  
東北地方多雪帯において、近年新たに流入が確認されているニホンジカやイノシシについての低コストの個体群モニタリング技術の開発
- ③ 野生動物個体の遺伝情報モニタリング  
ニホンジカやイノシシ・イノブタなどの生息状況を把握するための遺伝子サンプル集積体制の構築
- ④ 東北野生動物管理研究交流会の開催・支援  
東北における野生動物管理研究拠点の形成、研究機関・行政・民間組織との連携強化

### <実施体制>

山形大学内：江成 広斗（農学部・准教授、拠点代表者）、林田 光祐（農学部・教授）、玉手 英利（理学部・教授）、半澤 直人（理学部・教授）  
学外協力者：齊藤 正一（山形県森林研究研修センター・研究主幹）、宇野 壮春（[同]東北野生動物保護管理センター・代表）、奥田 圭（福島大学環境放射能研究所・特任助教）

## 帰還困難・居住制限区域内における野生動物の生息状況

奥田 圭

福島大学環境放射能研究所

福島県沿岸部では、2011年3月に発生した東日本大地震により津波被災や原発事故に伴う放射能汚染が生じ、人間生活の継続が困難となった。その結果、農地や住居などは放棄され、耕作放棄地や空き家などが多数存在する特殊な環境が広範囲に渡って創出された。耕作放棄地は、小・中型哺乳類の重要な生息場所として機能することや、大型哺乳類の隠れ場所となることが知られている。また、空き家はイエネズミ類やアライグマ、ハクビシンなどの繁殖場所やねぐらとして機能することが報告されている。これらのことから、津波被災および放射能汚染によって人間活動が低下・停止した地域では、野生動物の生息状況に大きな変化が生じていることが考えられる。

そこで、私たちの研究グループでは、人間生活が再開していない津波被災地域（南相馬市）、放射能汚染によって人間の立入が制限されている地域（以下、放射能汚染地域）（浪江町）、震災後も人間生活が継続している地域（南相馬市・相馬市）の3地域において野生哺乳類の生息状況と彼らの食性を調査し、それらの情報から人間活動の低下・停止に伴う野生哺乳類群集の変化とその変化機構について解明したいと考えている。

震災から5年弱が経過した現在、人間活動が低下・停止している被災地域にはどのような野生動物が生息しているのだろうか、そして、彼らが生息していることによって人間が帰還する際にどのような課題が浮き彫りになるのだろうか、本講演ではそれらを整理し、今後の被災地域における野生動物管理について議論したい。



## 「動物の縄張り」に帰る

～原発事故 5 年 避難住民たちの今～

藤松 翔太郎

NHK 福島放送局

### 1. 概要

東京電力福島第一原子力発電所の事故からまもなく 5 年。放射線量が高くなってしまった地域一帯から 5 年もの間、人だけが姿を消した。この間、故郷に強い思いを抱く住民たちは、必死な思いで故郷での営みを取り戻そうとしてきた。放射性物質も除染により取り除かれ、栽培を認められる農作物も増えてきた。国の政策も「福島への帰還」に舵を切っている。「放射線量さえ下がれば、元の生活に戻れる」と信じて。

だが、原発事故から 2 年が経った頃、ある避難住民に言われた一言が今も頭から離れない。「動物の縄張り」に人が檻を作って生活するみたい」。避難初期では、住民の 8 割強が、一時帰宅した住宅でネズミの被害があったと答えた。イノシシが昼間の住宅地でも目撃されるようになった。人の圧力が失われた中で大きく行動を変えた野生動物。今年 9 月、帰還が始まった楡葉町では、飼い犬がイノシシにかみ殺されるという事件が起きた。他にも「屋根の上から動物が歩く音がする」、「恐いから玄関の前にイノシシより高い板を常に置くようになった」、「アライグマが畑の作物をかじってたら、病気がうつるらしい」。震災前まで、とりわけ意識することもなかった野生動物との関わりが突如表面化し、正しい知識も無いまま噂話だけが広がって、不安をかき立てる。この状況に対して、さらなる手立てが必要なのか。それとも「人が戻れば、動物は山に帰る」のか。何が正しく、また何が間違っているのか。さまざまな「わからない」の積み重ねの中でふるさとに戻らざるを得ない住民たちは、漠然とした不安を膨らませ続けている。

私は、震災から 2 年が経った春から現在に至るまで、野生動物への不安を抱えながら帰還を進める住民たちの思いを取材してきた。かつては、自然な摂理の中で共生してきた里地里山の住民と野生動物がこの 5 年でどのような軋轢を生むようになってきたのか。また、今後どうすれば住民たちは安全に元の生活に戻ることができるのか。これまで見聞きした住民の意見や不安を、率直に代弁し、専門家のみなさま、行政のみなさまと、今後避難区域における野生動物対策において何が必要になっていくのかという議論ができたと思う。

### 2. 内容

- ① 南相馬市小高区の米農家と野生動物の戦い
- ② 富岡町猟友会の猟師たちの苦闘
- ③ 「わからない」が助長する、動物への漠然とした不安



## 低レベルで放射能汚染された地域における これからの野生動物管理

小寺 祐二

宇都宮大学雑草と里山の科学教育研究センター

2011年3月に発生した東京電力福島第一原子力発電所の事故により、イノシシの管理を進めるうえで、放射性核種による汚染の影響が新たな課題として提起された。1986年4月26日に発生したチェルノブイリ原子力発電所事故後に実施された研究では、特にイノシシは長期間に渡って放射性セシウム（主に $^{137}\text{Cs}$ ）に高濃度汚染されやすい種であることが指摘されている。例えば、ドイツ南西部のPalatinate Forestで2001年から2003年にかけて行われた研究では、イノシシの筋中 $^{137}\text{Cs}$ 濃度が冬期には低下するものの夏期には600 Bq/kgを上回ることが確認され、 $^{137}\text{Cs}$ を高濃度に集積して地中に子実体を作るキノコ *Elaphomyces granulatus*（ツチダンゴ属ツチダンゴ科ツチダンゴ）の摂食がイノシシ肉汚染の主原因であることも明らかにしている。これとは別に、汚染の指標となる土壌から肉への $^{137}\text{Cs}$ の移行係数は、イノシシでは生態学的な倍加時間26~27年となるとする報告もある。現段階で、欧州で発生している状況が日本でも再現されるかは分からない。しかし、放射性核種による汚染状況のモニタリングが、日本のイノシシ個体群管理においても欠かせないことは明らかである。本講演では、八溝山系イノシシ個体群を対象に、原発事故後まもなく演者らが実施した放射性セシウムによる汚染状況調査と、那珂川町イノシシ肉加工施設における全頭検査の結果に基づき、放射性セシウムによるイノシシの汚染状況について解説する。さらに、低レベルで放射能汚染された地域におけるこれからの野生動物管理について議論を展開したい。



## 会津地方におけるこれからの民間団体の役割を考える

今野 万里子  
NPO 法人お一でらす

福島県は「浜・中・会津」と県土を3地方に分類して表現するが、それぞれの地方によって気候風土や環境が異なる。それに伴い、生息する野生動物も異なることから、当然、鳥獣害の質も異なっていた。しかしながら、近年では、積雪地帯である会津地方には生息しないとされていたイノシシやニホンジカが目撃され、被害も増加傾向にある。会津地方を拠点としてクマ・サルを中心に活動してきたが、中通り・浜通りと同様にイノシシやニホンジカの被害に備える必要に迫られてきた。そのような時、民間団体としてどのような役割を果たすことが可能だろうか。その役割を検討した。結論から述べると、民間団体、特に私たちのような NPO はその地域を支援するために存在しており、NPO が主体となって鳥獣害対策を行ってはいけない。成功につながる鳥獣害対策は「地域に暮らす住民が対策員になること」であると信じている。その考えに至った主な理由を説明する。

- ① 鳥獣害対策は、タイムリーに行う必要がある。「さっきそこに居たサル」に向けて花火を打っても、なんの効果もない。今、まさにその場に出没・被害を及ぼしているサルに向けて花火を打つ必要があり、それができるのはそこに暮らす地域の人々である。それを実行するための新しい手法やアイデアを提供するのが、民間団体である。
- ② 鳥獣害対策は、短期的な視点では解決しない。NPO など民間団体に関わるには、予算が必要になる。確かに、鳥獣害の専門家が対策に従事することは地域や行政にとっても心強いことだろう。しかし、予算が取れなくなったらその素晴らしい対策は終わってしまう。その対策が終わった時点から、再び被害が始まるのだ。決して、素晴らしい対策でなくても、少しずつ、継続的に鳥獣害対策を行うことの方が重要である。そのためには、予算の有無に関わらず地域住民が自らのために鳥獣害対策に取り組むことが重要である。

おそらくは「地域が主体的に鳥獣害に取り組むためにはどうしたらいいか？」が最も関心が高い点であろう。それについては、どの自治体も模索中であると思う。それは、地方、地区、地域ごとに住民が異なり、そこには地域性がうまれるため「正解」が存在しないからだと考えている。そこは複数地域をまたいで活動する民間団体の最も苦手とするところではないだろうか。一方で、自治体にはその地方出身の職員も多く含まれ、地域性の把握は得意分野といえるだろう。鳥獣害の専門知識を有する民間団体が、その自

治体を支援することによって、それぞれの苦手分野を埋めることができる。また、地域によっては鳥獣害担当課以外（例えば地域振興や防犯等）の課を入口にした方がうまくいく場合もあり、課に縛られず対応できるのも民間団体ならではのメリットである。まとめると、その地域にあった入口や手法を選択することが、鳥獣害対策に取り組むためのコツであるとともに、そのために必要な知識やアイデアを提供することが民間団体に求められる役割ではないだろうか。



基調  
講演

## 鳥獣対策の次の一手

平田 滋樹  
長崎県農林部農山村対策室

近年、国内の野生動物管理を取巻く環境は、鳥獣保護管理法の改正や国のニホンジカ・イノシシの個体数半減目標など、大きな転換期にあるとともに、制度や事業の創設拡充といった「鳥獣対策バブル」の様相を呈するほどの充実期にある。しかしながら、多くの地域で鳥獣被害は「被害額が高止まり状態」、「減少傾向にあるものの未だ深刻」という常套句の元、「行政職員の業務」と「猟友会等への依存」は増し、「農家は鳥獣被害に辟易」とする状況が続いている。このような突破口がなく出口も見えない状況の中、新聞やテレビに踊る「他地域の新技术の開発と導入」は輝いて見え、先進地視察や地域導入が行われるが、大々的に取り上げられた対策の続報を聞くことはほとんどない。

では、どのような対策が有効なのか？この問いには、「どのような対策なら地域が継続できるか」という反問の答えが重要となる。なぜなら、今後の日本では「人の数は確実に減り、人為圧の低下によりイノシシやニホンジカの数は増加する可能性が高い」ため、鳥獣対策を行う場合には、①現状を把握し、②対策に必要な人材確保や体制整備を行いながら、③地域にあった効率的かつ効果的な対策技術を選択した上で、④それを計画的かつ継続的に実行する必要がある。これに加えて、他地域の失敗事例も含めた情報を収集しておき、来るべき事態に備えて次の一手を打っておかなければならない。

長崎県では 2004 年がイノシシ被害のピークで 4.6 億円の農作物被害が発生、2006 年に全国に先駆け専門員を設置して鳥獣対策に取り組んできた。その後、被害は減少傾向にあったが、2010 年に再び 4.1 億円の被害が増加、対策の強化や見直しが必要となった。そこで、上記①から④の作業を行いながら被害対策の基本方針を定め、実行のためのツールや制度を整備した。特に、過疎化・高齢化等により個人では地域を支え切れなくなると予想し、チームで捕獲作業を行う捕獲隊（旧 1303 特区制度の活用）の設置を進めた。また、人材の育成よりも活用を念頭において研修会を開催しているが、今では青年農業者が被害対策の核となる地域もできつつあり、人口減少社会における鳥獣対策への次の一手として機能している。交流会では、これら取組の具体的事例とその裏側を紹介するが、本講演が東北における鳥獣対策の一助となれば幸いである。

平田 滋樹

長崎県農林部農山村対策室

**鳥獣被害対策を健全に進めるためのキーワード**

- ① 靈感商法・・・対策を進めなければ被害が増えて行政も地域も困る
- ② 諜報活動・・・他地域の失敗や成功の裏に潜む秘密を聞き出す
- ③ ネズミ講・・・指導者、実践者などの仲間を増やしバトンを渡す

個体数増加や分布域拡大が起こる新規被害発生地域（新規生息地）では・・・

- ・対策の専門家がない
  - ・被害状況の把握が困難
  - ・捕獲技術を持った人がいない など
- ⇒「知識・情報・技術」が不足し、対策の推進が困難と思われがち  
ところが実際には・・・
- ・国内には対策の専門家なんてほとんどいない
  - ・被害は地域が認識して騒ぎ出す以前から発生している
  - ・農家や狩猟者の知識や技術は対策にいくらかでも活かせる
- ⇒重要なのは現状を把握して、他地域の事例を参考に（反面教師ならなお良い）、  
地域に正しく楽な技術や体制を根付かせること

**現状把握から対策推進までに注意すること（開き直すこと）****① イノシシがいることを受け入れる**

「数年前まではイノシシはいなかった」からスタートすると・・・

- ・被害対策は余計な作業と誰もが認識してしまう
- ・達成が困難なイノシシの根絶を当初の目標にしてしまう
- ・イノブタ議論だけが活発になる

⇒既に地域にイノシシが侵入、定着、繁殖している状況を踏まえて、実効性のある対策に使命感を持って取り組む

**② 余計なことを考えたり試したりする余裕はないことを自覚しておく**

「イノシシの数を推定してメス中心の捕獲による科学的な管理を行う」とか

「あつと言う間にイノシシを根絶させるやり方（忌避剤、避妊薬等を含む）」

言い出すと・・・

- ・初期対応時には十分な情報収集と迅速かつ計画的な対策実施が重要だが、実施できない方法や情報は現場を混乱させるだけ

- ・将来的に可能性がある方法については試験研究機関に開発や実証を任せる
  - ・無駄な対策とその作業は、労力・費用・時間・意欲の損失に繋がる
- ⇒鳥獣対策には特効薬はなく、地道な活動を飽きずに続けるか工夫する

### ③ 先進地でないメリットを活かす

「他地域の鳴り物入りで開発、導入された方法」に考えもなく飛びつくと・・・

- ・多くの場合、失敗する（被害対策の成功も失敗もそれだけの理由がある）
- ・重要なのは他地域の対策の背景とその後に注目し、地域にあったアレンジが必要

⇒対策効果の検証を行いながら、地域の実情に合わせた対策に変えていく

### ④ 人材は足元に転がっている

「専門家の登用は運次第」と考えておかないと・・・

- ・専門家に全てを任せるのではなく、独自の人材育成も併せて進める
- ・必ず地域内に頑張っている人、能力のある人がいっぱいいます
- ・自分も含めて人を大事にしましょう、技術も知識も人次第

⇒キーパーソンは必要だが、担当者も地元も特定の人に負担がかかる状態では長続きしないので、なるべく人の輪を広げる取組を心がける

長崎県で特に注意しながら行っている対策手法など

### ① 人材の育成と活用：イノシシ対策A級インストラクター研修

- ・イノシシ対策に必要な知識・技術を有し、それを地域に普及させる指導者の育成
- ・対象者は県職員（主に農業普及指導員）、市町担当者、農業関係団体職員（農協、農業共済）、猟友会員など
- ・フォローアップ研修を実施し、班に分かれて現地指導等を実施

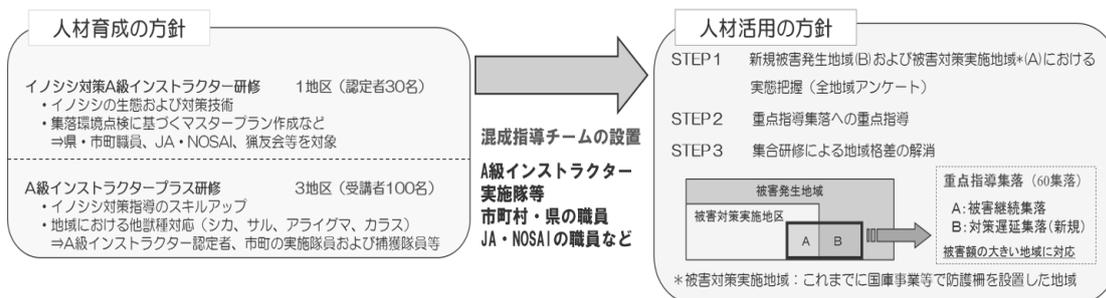


図 人材育成と人材活用の模式図

③ 地域ぐるみの捕獲体制整備：捕獲隊（旧 1303 特区制度）

- ・ 狩猟免許所持者をリーダーとして、免許を持たない住民も捕獲作業の補助を行うチームづくりを推進
- ・ 捕獲従事者（猟友会員等）にはわなの設置や見回りなどを手伝ってもらえ、地域住民にとっては被害発生時に速やかに捕獲作業に入れ、市町村の担当者は猟友会と地元との調整で板ばさみにならなくても済む、夢のような制度
- ・ 制度に対する担当者、捕獲従事者、地域住民の理解が重要

④ 緩衝帯整備と維持管理の継続：ヤギ放牧による省力的な草地管理

- ・ イノシシ対策（生息地管理と防護柵の見回り点検のため）として緩衝帯整備後の草を省力的に管理するために家畜放牧を推進
- ・ 無人島で半野生化して生態系被害の原因となっているヤギを捕獲し、集落への導入を事業化
- ・ ヤギの採食による除草効果よりも、地域がヤギ導入を決めるために話し合いヤギを世話することで圃場の見回りなどが増えることにより、イノシシ出没が減少する



会場：大学生協 2 階 ホール

**【P-1】 野生鳥獣対策システムのご紹介**

\*三浦紳<sup>1</sup> (1: 株式会社東北電子計算センター)

**【P-2】 米沢の鳥獣害対策**

\*神村大史<sup>1</sup> (1: 米沢市農林課)

**【P-3】 土地利用の複雑さとニホンザルによる農作物被害の加害度との関連性**

\*江成はるか<sup>1</sup>・江成広斗<sup>2</sup> (1: 雪国野生動物研究会・2: 山形大学農学部)

**【P-4】 岩手県の大規模野菜圃場における恒久電気柵を活用したニホンジカ対策事例**

\*中森忠義<sup>1</sup> (1: 岩手県八幡平農業改良普及センター)

**【P-5】 飼料用トウモロコシ畑に侵入するツキノワグマ対策：東北大学川渡フィールドセンターの取り組み**

\*小倉振一郎<sup>1</sup>・遊佐良一<sup>1</sup>・菊池恭則<sup>2</sup>・齋藤雅典<sup>1</sup> (1: 東北大学大学院農学研究科・2: サージミヤワキ株式会社)

**【P-6】 地域性を活かした体制づくり～会津地方における 3 市町の鳥獣害対策～**

\*今野万里子<sup>1</sup> (1: NPO 法人おーでらす)

**【P-7】 針葉樹人工林の広葉樹林化はニホンザルの生息地回復に貢献するか？**

\*江成広斗<sup>1</sup>・江成はるか<sup>2</sup> (1: 山形大学農学部・2: 雪国野生動物研究会)

**【P-8】 津波被災および放射能汚染に伴う人間活動の低下が野生哺乳類群集に与える影響**

\*志賀彩美<sup>1</sup>・奥田加奈<sup>2</sup>・奥田圭<sup>3</sup> (1: 福島大学理工学類・2: 野生どうぶつ調査団・3: 福島大学環境放射能研究所)

**【P-9】 福島市における個体数調整による群れの変遷**

\*今野文治<sup>1</sup> (1: 新ふくしま農業協同組合)

**【P-10】 イノシシの死骸に寄ってくる鳥獣たち**

\*奥田加奈<sup>1</sup>・奥田圭<sup>2</sup> (1: 野生どうぶつ調査団・2: 福島大学環境放射能研究所)

**【P-11】 枯死材の間伐後の経過年数とアリの種構成の関係**

\*名生啓晃<sup>1</sup>・青井俊樹<sup>1</sup> (1: 岩手大学農学部)

**【P-12】 山形県庄内地域におけるコアジサシの飛来状況と繁殖モニタリング (2015 年)**

\*長船裕紀<sup>1</sup>・岡崎一介<sup>1</sup> (1: 日本野鳥の会 山形県支部)

**【P-13】 Combined GPS-Dosimeters for Determining External Dose to Free-Ranging Wildlife (外部線量を測定するための GPS 付き線量計の野生動物への適用)**

\*Thomas Hinton<sup>1</sup>(1: Institute of Environmental Radioactivity Fukushima University)

**【P-14】 天栄村における哺乳類について**

\*岩崎雄輔<sup>1</sup> (1: 会津若松ザベリオ学園)

**【P-15】 獣害対策管理者の健康管理のための診断実施 (予報)**

\*竹田努<sup>1</sup> (1: 宇都宮大学農学部)

**【P-16】 山形県でのニホンジカ目撃状況と目撃箇所の特徴**

\*古澤優佳<sup>1</sup>・齊藤正一<sup>1</sup>・千葉翔<sup>1</sup> (1: 山形県森林研究研修センター)

**【P-17】 野生のニホンリスによる給餌台利用の実態研究**

\*高橋真央<sup>1</sup>・青井俊樹<sup>1</sup>・丸山正樹<sup>2</sup>・西千秋<sup>3</sup> (1: 岩手大学農学部・2: 盛岡市動物公園・3: 岩手野生動物研究所)

**【P-18】 東北日本海側の人口減少地域におけるハクビシンの生息地選択**

\*佐藤有沙<sup>1</sup>・江成広斗<sup>1</sup>・江成はるか<sup>2</sup> (1: 山形大学農学部・2: 雪国野生動物研究会)

**【P-19】 盛岡市猪去におけるハクビシンの行動圏の季節変化と環境要因の検証**

\*福島良樹<sup>1</sup> (1: 岩手大学農学部)

**【P-20】 積雪寒冷地におけるホンドタヌキ(*Nyctereutes procyonoides viverrinus*)の冬の食性**

\*市川颯太<sup>1</sup>・青井俊樹<sup>2</sup> (1: 岩手大学大学院農学研究科・2: 岩手大学農学部)

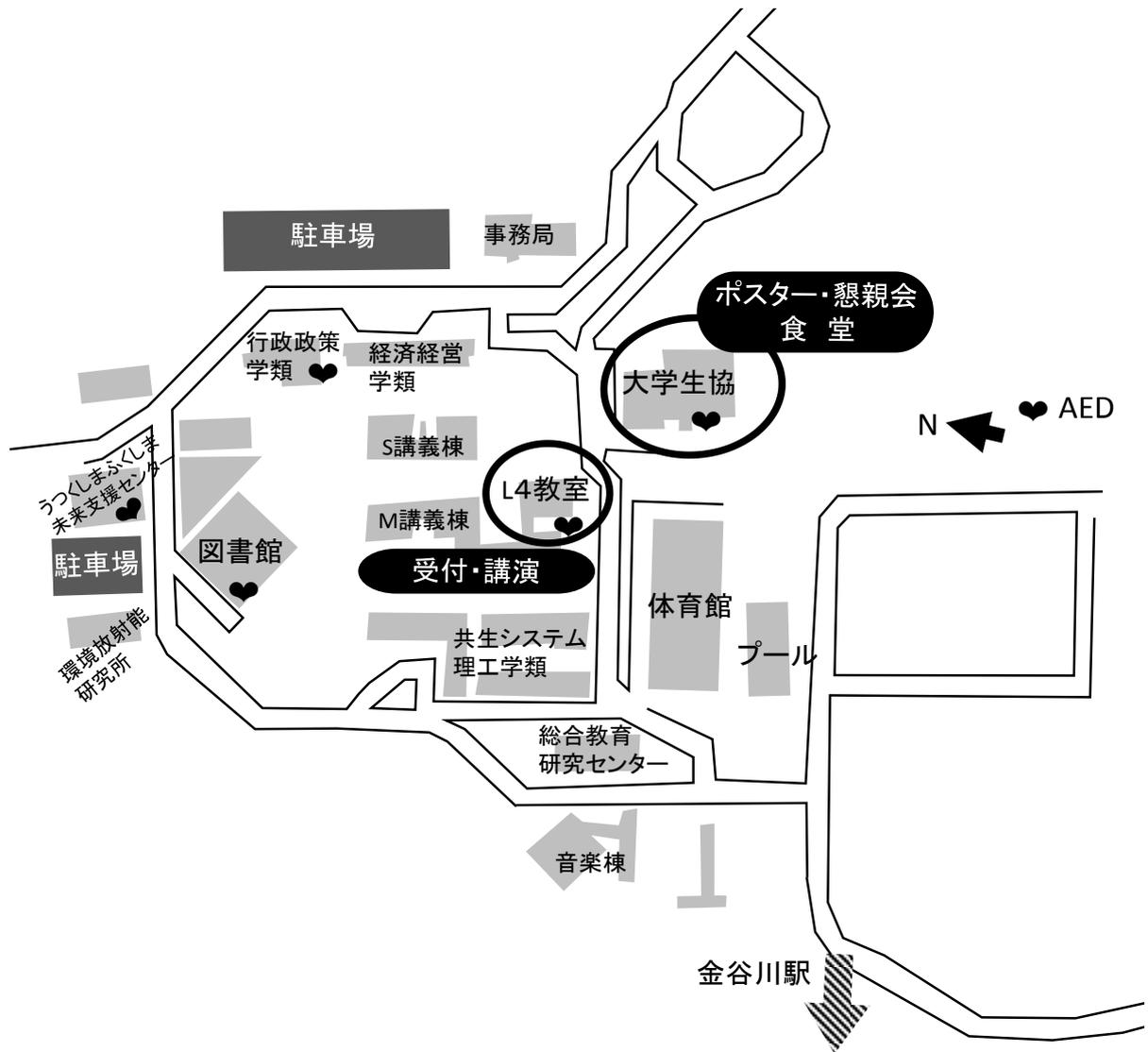
**【P-21】 山の実りとツキノワグマの食性の関係**

\*太刀川晴之<sup>1</sup>・青井俊樹<sup>1</sup>・岩手大学ツキノワグマ研究会<sup>2</sup> (1: 岩手大学農学部・2: 岩手大学)

**【P-22】 伊達のイノシシ「皮」から「革」へ**

\*伊達市

# キャンパスマップ



## 注意事項

※大学構内は全面禁煙です。

※集会中、携帯電話はマナーモードに設定してください。

## 昼食について

※大学生協に食堂があります。営業時間は 11:30~13:30 です。

## JR東北本線時刻表

### ◎金谷川駅方面

福島駅⇒金谷川駅

時	
8	11 43
9	37
10	28
11	04 34
12	26
13	30
14	20
15	04 58

郡山駅⇒金谷川駅

時	
8	39
9	28
10	08
11	06 56
12	43
13	39
14	09 53
15	40

### ◎福島駅方面

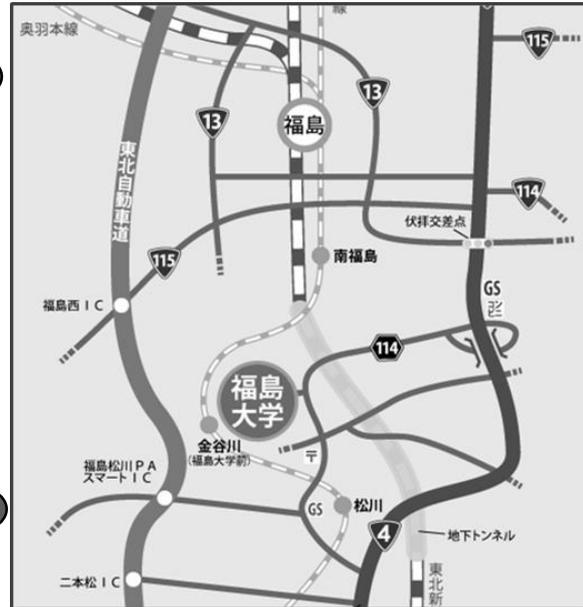
金谷川駅⇒福島駅

時	
16	16 49
17	21 51
18	22 54
19	18
20	20 55
21	31

### ◎郡山駅方面

金谷川駅⇒郡山駅

時	
16	08 38
17	01 34
18	03 36
19	00 30 55
20	46
21	39



【主催】山形大学 YU-COE(C) 人口減少社会適合型野生動物管理システム創成拠点

福島大学

【後援】福島県、「野生生物と社会」学会

【研究交流会実行委員】

山形大学：江成 広斗(拠点代表)・林田 光祐・玉手 英利

福島大学：奥田 圭・西崎伸子

山形県森林研究研修センター：斉藤正一

東北野生動物保護管理センター：宇野 壮春

福島県農業総合センター：木幡栄子

新ふくしま農業協同組合：今野文治

福島ニホンザルの会：大槻晃太

野生どうぶつ調査団：奥田 加奈・江成 はるか(事務局)